

四半世紀を経た江別サイクリングクラブの諸活動と社会環境

著者	水野 信太郎
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	8
ページ	179-193
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002582/

四半世紀を経た江別サイクリングクラブの諸活動と社会環境

On the Movements of the Ebetsu Cycling Club that progressed
a quarter of a Century since 1990, and Environments in Society

水 野 信 太 郎¹⁾
Shintaro MIZUNO

1. はじめに

北翔大学に生涯スポーツ学部が開設されて満8年間の月日が経過しようとしている。この期間に新カリキュラムへの更新・移行なども実施してきたが、スポーツ教育学科の卒業生総数は840名余に及ぶ。この機会に当学部名称である「生涯スポーツ」の中に、本稿の主題であるサイクリングという競技・種目を位置づけながら、設立されてから25年目を迎えた江別サイクリングクラブの最近5年間の活動を振り返ってみる。このような行為を通して現代社会が内包している日常生活と健康維持に関わる諸問題を顕在化する試みとしたい。

2. 生涯スポーツという概念

本稿を草するに際して予め、生涯スポーツの概念を再確認しておきたい。ごく一般的に生涯スポーツとは年齢や性別を問わずに、幼児から高齢者まで、だれもが参加することのできるスポーツを意味する。すなわち一生を通じてあらゆる年齢層の人々が、いつでも、どこでも、だれとでも気軽に楽しむことので

きるスポーツのことである。したがって生涯スポーツに含まれる種目としては、参加者が高齢を迎えたのちであっても、ほぼ一生にわたって楽しむことのできるスポーツが代表的な種目とされる。

人間の身体は基本的に、加齢とともに衰えを示す。その衰えの最も顕著な部位は、足腰とりわけ脚部と膝関節であろう。このような現実にあって、優れた走力や驚異的な跳躍力を有しなくとも、若年層と互角に勝負することのできる競技であってこそ真の生涯スポーツと定義することが出来よう。具体的にはゴルフ、ビリヤード、ボウリングなどの球技である。またバドミントン、卓球やソフトテニスなどのラケット競技は、当該種目の熟達競技者ならば、経験の浅い青年選手を相手にしてハンディキップなしに競技に臨むことが十分に可能である。その理由は、競技経験に裏打ちされた優れた判断力を持って、自身の脚力の衰えを相殺して余りある、競技内容を発揮することが出来るからである。

球技以外では社交ダンスなど、競技としての側面だけでなく、楽しみとして普及している身体行為も生涯スポーツである。くわえて

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

ゲートボールやパークゴルフなどのように、ニュースポーツとして新たに考案された種目には高齢者に適したスポーツが多く見られる。さらに目覚ましい走力を必要としない伝統的な競技種目もある。とりわけ国際的な洋弓や日本の弓道などは、若年競技者が有利であるとは決して断言できない。このように弓という領域の種目は、極めて重要な生涯スポーツとして位置づけることができる。

乗り物の種目は生涯スポーツとして、きわめて注目に値する競技群である。馬術、漕艇、航空機、その他のモータースポーツなどである。但し当該種目グループは道具、設備、施設、練習場所、指導者などの諸条件がそろっている必要があり、万人が手軽に参加できるというスポーツではない。ウィンタースポーツの中では、ゲレンデスキーなどは生涯スポーツの代表格である。激しいジャンプをする競技を除いてであるが、自然環境など地域的な条件・制約はあるものの、スポーツとしては広く普及している好例だと言える。

上記以外の乗り物系スポーツに自転車をあげることができる。自転車という乗り物は、きわだって身近で手ごろな移動手段である。しかし自転車に乗ることが出来ない層として、近年、経済的に恵まれない子供たちが課題視されている。貧困を抱える子供たちが幼少期において体格に合う小さな自転車を与えられることなく育つことが原因で、成長した後も自転車に乗る機会がなく、このため成人しても社会の中で不利な移動環境から抜け出すことができないのではないかと懸念が生じている¹⁾。今日的な課題のひとつである。

その点はともかく基本的にはサイクリングという運動・競技は、より多くの人々にとっ

て好ましい生涯スポーツだと言える。本稿では上記のような背景から、生涯スポーツとしての自転車に関するリポートを展開する。

3. 自転車を取りまく最近の動向

北海道の冬季間は積雪によって、自転車スポーツを楽しむことが困難な地域が多い。この状況を受けて道内の新聞紙上では、雪解けが近づく自転車に関する記事がしばしば掲載される。「待ってました／自転車の季節／久しぶりのサイクリング 整備をおさらい²⁾」や「Q 自転車に乗る時に気をつけること／点検しっかり ルール守って／空気圧、ブレーキ確かめよう³⁾」は、すでに自転車に手慣れた人々向けに再度扱い方の注意喚起を促している。自転車に対する注意事項はメカニカルな点だけではない。安全な走行のため、車両としての法規上の基本的な遵守項目も重要である。「自転車 正しく乗ろう⁴⁾」という記事などは車両の点検にも触れているが、事故防止のための走行方法に力点を置いた内容である。また幼い自転車利用者を意識して乗り始めに関する助言も見られる。「自転車攻略 こつはバランス／まずペダルはずし地面ける⁵⁾」や「自転車 手軽に私仕様 サドル、フレーム…色、模様自在⁶⁾」などとして幅広い年齢層に向けての自転車の利点が紹介されている。以上の大半は春季に新聞紙上の記事として掲載されたものである。

近年はエコロジカルな視点から自転車への社会的な関心が示され、商業界にあっても自転車に注目する姿勢が強い。たとえば「自転車大型店／参入相次ぐ／ホームック札幌1号店⁷⁾」あるいは「自転車関連1000品目ずらり

／イオンバイク 北見に道内1号店⁸⁾」さらに「もう雪解け 自転車商戦 加速中／「3人乗り」「パンクなし」人気⁹⁾」などの記事がある。くわえて自転車関係の新商品も開発されている。「普段は見えないヘルメット／首に巻くエアバッグ好評／自転車用、スウェーデン女子学生発明¹⁰⁾」ならびに「電動自転車 シニアに照準／ヤマハ、ブリジストン サドル低く、軽く¹¹⁾」などは国内各社のみならず世界各国においても新たな考案・工夫が続けられていることを知らしめている。また「手入れ簡単な電動自転車¹²⁾」では次のような新発想が記事となっている。電動アシスト自転車の駆動機構に従来のようなチェーンを用いず、カーボン繊維を織り込んだベルトを採用しているという。このため注油の必要がなく、故障も少ないとされる。なお当該電動自転車は前輪を電動でアシストする仕組みとの事である。

北海道ならではの記事も見られた。「スパイクタイヤ じわり普及／自転車 過信は禁物／雪山で死角、道幅狭く¹³⁾」では、

自転車に「スパイクタイヤ」を装着し、冬場の雪道や凍結した道を走行する人が増えている。これまで配達業務で使われたり、スポーツ自転車の愛好家が購入したりするケースが多かったが、近年は学生やサラリーマンが通勤・通学用に使うなど購入層に広がりが出ている。ただ、雪道走行の危険性がなくなるわけではなく、道警などは「冬場の自転車利用は極力控えてほしい」と呼びかけている。

としている。

新製品ではなく、中古自転車の再利用を呼びかける方向性もある。「中古自転車 快走

／消費税増税で注目度アップ／放置車をリサイクル、新品の半値¹⁴⁾」には、中古自転車店経営者の発言として

「3月25日から4月10日ごろまでが一番売れ、年間売り上げの約3割を占める」と話す。春に売れる理由について、「真夏のビールのように自転車も季節もの。雪が解けた直後に購入意欲が湧くのでしょう」と記されている。春の自転車関連記事としては、自転車コースを紹介する内容も見られる。「とっておきスポット5／エルフィンロード＝北広島市／走るもよし、撮るもよし¹⁵⁾」などはその好例で、江別サイクリングクラブが主要な構成グループとして所属している札幌サイクリング協会も、毎年春季に同コースを正式行事の一つとして走行している。江別サイクリングクラブの場合には、毎年午前9時に江別市野幌若葉町の白樺通り（南北方向）と南大通り（東西方向）の交差点北西側に集合・出発する。その後は野幌総合運動公園線から道道江別恵庭線を南下して、北広島市域に入る。広島本通の西側、共栄町1-12に所在する無量山光顕寺の北東角を右折して広島公園通を西に進む。そして北広島市総合体育館において、当クラブの上部組織である札幌サイクリング協会の他グループメンバーと合流し、正式な開会式を挙行する。その後にエルフィンロードを北上し、札幌市白石区南郷通8条南2丁目の万生公園まで適宜いく度かの休憩をとりながら走行する。この万生公園で解散となり、江別チームは札幌のメンバーと別れて江別への帰路をとる。

自転車への関心は道内に限らず、全国的なものである。前報「設立20年目の江別サイクリングクラブ¹⁶⁾」を執筆した時点において

TV放送が開始された日本放送協会のBSプレミアム放送番組の一つであった「にっぽん縦断こころ旅」に関する記事もある。京都府舞鶴市の広報公聴課が編集し同市が発行している『maizuru 広報まいづる 4月1日号』には「にっぽん縦断こころ旅 ～思い出の場所、エピソードを募集¹⁷⁾」という記事が掲載されている。この舞鶴市は日本海に面した引き上げのまちとして知られ、同番組でもとりあげられ取材・撮影・全国放送された。火野正平氏が自転車で各都道府県を訪ねる企画である。今年度で6年目の人気番組である¹⁸⁾。

まったく別で、自転車スポーツをモチーフに設定したTVも放送された。渡辺航の漫画「弱虫ペダル」を原作とした連続ドラマである。この番組は、BSスカパー！でドラマ化された。その第1回分のみ無料放送の第1話に関する事前記事が掲載された¹⁹⁾。

一方、全国的な話題ではなく北海道内にこだわって自転車競技大会に関する記事を見渡しておきたい。「雨の中、ママチャリ力走／札幌・モエレ沼で3000人耐久レース²⁰⁾」、「こいで発電 意識どう変化？／自転車に太陽光パネル、風車、ダイナモ／北大グループ 耐久レースで実証実験²¹⁾」、「トライアスロン総距離226.2キロ／「アイアンマン」8月道内初開催／洞爺湖、羊蹄山麓ぐるり²²⁾」、「仲間4時間汗／ママチャリ疾走／札幌で耐久リレー大会²³⁾」、「十勝岳 自転車で駆け上がる／上富良野で7月に大会／高低差 道内最大の千メートル²⁴⁾」、「走／ママチャリ 4時間耐久レース 札幌²⁵⁾」、「夏のニセコ 銀輪駆ける／道内初のクラシックレース²⁶⁾」、「オホーツクの風／受けて829人完走／サイクリング閉幕²⁷⁾」、「こいだ先 美味が待つ／自転

車で食巡り／空知を駆けた²⁸⁾」、「西胆振 自転車で疾走／74人参加 初のロングライド²⁹⁾」、「初秋の十勝快走 全道サイクリング³⁰⁾」、「ツール・ド・北海道 あす開幕／道央・道東 疾走543キロ／見どころ チームワークが勝敗左右³¹⁾」、「ツール・ド・北海道開幕／銀輪 大地駆ける秋³²⁾」、「千歳でツール・ド・北海道開幕／「行けー！」選手に声援³³⁾」などである。毎年、恒例のレースもあるが、新たな試みも含まれる。それらの開催地は札幌市、洞爺湖町、富良野市、上富良野町、ニセコ町、斜里町、美瑛市、千歳市ほかである。ママチャリ耐久レースの運営に関しては、江別サイクリングクラブも札幌サイクリング協会のメンバーとして毎年、裏方として支援体制をとっている。

レース時に限らずサイクリングはスポーツであり、このため少なからず危険を内在している。このリスクを端的に思い知らされた事故が、与党前幹事長の自転車事故³⁴⁾であった。

自民党の細田博之幹事長代行は26日の記者会見で、趣味のサイクリング中に負傷して入院した谷垣禎一幹事長について「頸髄を損傷し手術を受けた」と明らかにした。その後も報道が続く。

自転車事故のけがで入院している自民党の谷垣禎一幹事長が退院時期が見通せないことを理由に、安倍晋三首相に辞意を伝えていることが29日分かった³⁵⁾。

とある。一時期「谷垣氏辞意 首相は続投要請／「細田氏が当面代行」案³⁶⁾」も出されたが、やがて「自民幹事長に二階氏／首相、谷垣氏の続投断念³⁷⁾」と報道されて現在に至る。この谷垣禎一氏はJCAすなわち公益財団法人日本サイクリング協会という全国組織の会

長である。スポーツに伴う危険性を軽んじることが出来ない事態の証左となった。

4. 社会問題としての自転車

前節でふれた谷垣氏の事故だけでなく、近年の自転車にまつわる事故は社会問題化している。このため自転車を利用する人々への啓発活動の必要性が叫ばれ続ける。「自転車／疑似運転で事故防止／麻生自動車学校 シミュレーター使う教室好評³⁸⁾」,「自転車 押して歩こう／福岡・天神地区／事故防止へ推進区間³⁹⁾」,「迷惑自転車やめよう／歩道暴走や駐輪…／札幌市など街頭啓発 道警, 取り締まり強化へ⁴⁰⁾」,「自転車運転 マナー守って／札幌中央署など街頭指導⁴¹⁾」などの見出しが新聞紙上を賑わした。しかし、このような実情が改善の方向へ向かったようすはない。「自転車ルール 動画で紹介／元コンサ曾田さん 学生らと制作⁴²⁾」という動きを示す曾田雄志氏のようなアスリートが現われる一方で、札幌の高校生が「自転車走行 気をつけて／高校生ら 反射材配り街頭啓発⁴³⁾」という活動も報道された。しかし警察官による指導が、より多くなった今日である。「自転車 マナー守って／江別署と組合が街頭啓発⁴⁴⁾」,「自転車事故防げ／札幌中央署など指導⁴⁵⁾」,「神出鬼没の自転車警官／パトロール隊結成 伊達署員⁴⁶⁾」という活動が展開された。

上記のような啓発活動を継続しても自転車利用者の中には、マナー違反あるいはルール無視ともいえる者が絶えなかった。自転車が社会的な問題となる時代なのである。このため以下に列举するような交通法規の厳格化を迎えることとなる。まず「現代かわら版 車

道の自転車 正しい走り方は？／記者が札幌中心部走行 疑問点を道警に聞く／歩行者妨害2万円以下の罰金⁴⁷⁾」と題した特集に始まり、同日の別の紙面では「江別署と学生グループ 自転車盗防止へタグ／鍵配り二重施錠を⁴⁸⁾」として自転車の防犯記事を重ねていた。更に「危ない自転車 厳罰化／酒酔い容疑 道内初逮捕／人身事故増 信号無視も⁴⁹⁾」,「自転車の講習義務化／対象や罰則なお検討⁵⁰⁾」と厳しさを増し、一方では「自転車交通ルール ゲームで学べます／白石署ホームページで公開／専門学校生4人が制作⁵¹⁾」と、さまざまな工夫も続けられる。しかし結果的に「自転車欠陥で転倒し障害 1億8900万円賠償命令／輸入元に 東京地裁⁵²⁾」という欠陥自転車に対する判決が出されたり、「悪質自転車に安全講習／14行為で義務化 携帯使用も対象⁵³⁾」と改正道路交通法の施行令が閣議決定された。その結果「自転車危険行為 摘発6521件／法改正後半年で 絶えぬ事故 憤る遺族⁵⁴⁾」という社会問題を生じて現在に至っている。

さまざまな側面において問題点を抱える自転車ではあるが、都心部において自転車を積極的に交通手段として活用しようとする試みが始動している。「ポロクル快走 札幌貸自転車／利用3.6倍 採算性になお課題⁵⁵⁾」や「札幌の自転車共同利用「ポロクル」5年目／会員登録1万件突破⁵⁶⁾」という札幌都心の動きに続いて、江別市の表玄関として位置づけられているJR野幌駅前の整備に関連して「野幌駅、道情報大拠点に市が50台／通勤、通学に自転車共用／8月開始、登録料500円⁵⁷⁾」,「8月開始の共用自転車／利用会員2日から募集／登録500円で11月まで無料⁵⁸⁾」,「自

転車共同利用 あす開始／愛称は「のっちゃり」／50台80人で利用⁵⁹⁾」という記事が掲載された。札幌も江別も同様の視点から、自転車の幅広い活用を実践している。都心部における自転車の課題は道外にあっても報道された。愛知県の名古屋駅前における「名駅前に駐輪の「筒」 大名古屋ビル地下／1000台分 中部初の高速収容⁶⁰⁾」では、

名古屋駅前の大名古屋ビルディングの地下に、約千台の自転車を収容できる機械式駐輪場が二月上旬から本格的に稼働する。名駅のすぐ近くに自転車を止めることができ、通勤や買い物が便利になる。歩道上でなく、地下に大型駐輪場を造ることで名古屋の「玄関口」の景観を損なわないようにする⁶⁰⁾。としている。そして

駐輪場に入れる自転車。ボタンを押すだけで地下へ運ばれる⁶⁰⁾。とのキャプションを付された写真も掲載された。いずれの都市でも、自転車は大いに活用したいところであるが、特定の場所に自転車が集まる事態に対する有効な対策が求められる昨今なのである。

北海道ならではの自転車活用法がある。旅行者が自ら自転車で、道内をめぐる体験型スポーツである。「検証さっぽろ圏 第4部・観光 3／中国人を狙え 下 サイクリング ツアー／景観生かし基盤づくりを⁶¹⁾」という比較的大きな記事から始まって、空知総合振興局が力を入れている「田園地帯 銀輪駆ける／空知巡る旅 観光資源化へ 振興局体験会⁶²⁾」,「どうおう見聞録／景観やグルメ 楽しむイベント人気／サイクリング 観光の柱に／自治体など意欲的に企画⁶³⁾」そして「旅を拓く 5／爽快 道北サイクリング／海外

富裕層中心に定着⁶⁴⁾」などに見られる通りである。外国人向けの集客を目途としながら、生涯スポーツ「サイクリング」に参加してもらう観光資源の整備である。

5. クラブ25年目の記念行事

これ以降に本年度、江別サイクリングクラブが実施した活動内容を記録する。例年と比べると本年度の行程は再三、降雨に見舞われた1年間であった。その最たる事例が平成28年6月25日(土)未明3:30にJR野幌駅北口を出発して北海道最北端を目指した「ECC 25周年記念 北端をめざす(江別～宗谷岬350km走行企画)」である。その全体像を図の1ならびに2に示す。筆者自身は第1区間と第6区間を各3名で走行した。そして翌日26日(日)の朝、稚内市街地から宗谷岬までの35.5kmを元気なメンバーと共に走破した。

激しい雨にたたられたのは、1日目の夕刻であった。もともと当該企画を、この時期に実施しようと計画した大きな要因は、この季節は日昼時間が長く自転車走行に有利である点にあった。まだ夜明け前の野幌駅を出て、国道12号線を東進する。

前もって聞かされていた当日の気象情報は、決して歓迎できる内容ではなかった。したがって雨に降られる覚悟は全員できていた。ちなみに同日の九州地区一帯は歴史的な雨量を記録した日となる。それでも第1区間41.3kmは、少々の降雨に3度ほど見舞われた程度で済んだ。筆者らはJR美咲駅西口まで、時速22～23kmのペースで無事に走行を終え次のチームと交代する。

雨が激しさを増したのは、第2区間の後半

から第3区間への引継ぎ地点であった。筆者たち自動車での伴走組は、強まる雨脚を気遣うばかりであった。夏至の季節とはいえ雨に濡れた走行者たちは、次のチームと交代した直後が最も寒い。雨に濡れながらも自転車で走り続けている間は、まだしも身体は耐えることができる。走行を終えて止まった時に身体と服装が濡れた状態で冷え始めることが問題となる。激しい震えに襲われるのである。

交代地点は自転車にとっても伴走車にとっても、より安全な道の駅など公的な場所を設定している。トイレなどの施設と設備は整っている。それらを利用して各自、体調を整えなければならない。

しばらく待って、天候が小康状態になるのを期待する。その甲斐はあった。しかし次の3名が走り始めると、その担当区間である40km以上をすべて走行し終えるまで雨が降らずにいてくれることは、遂にどのチームにもなかった。それでも雨に降られたとは言うものの、まだ周囲が明るい時間帯はよかった。

筆者らが担当して走り始めた第6区間である遠別の「道の駅」をスタート後、天塩を抜け「稚咲内」までの45kmは、急激に辺りが暗くなり極めて困難な条件となる。精神的な不安は、スポーツにおいて危険性をはらんでいる。このような状況が災いしたためか、不幸なことに日本海側を真っ直ぐ北上するべきであったコースから筆者たち3名だけが外れてしまった。結果的に、かなり東側に位置する内陸部まで入り込んでしまったため、中継地点から遠ざかる仕儀となる。今でも悔いが残る。

夕暮れ過ぎ、おそらく雄（おす）と雌（めす）の番（つがい）と目される野生のシカ大

小2頭が、すぐ道路近傍の暗闇に立ち尽くしていた。得難い体験ではあった。当方のスピードの速さに、鹿たちが逃げる間もなく、こちらが走り去る。やがて土砂降りの状態となる。この状況下を毎時27ないし28kmの速度で走り抜けることとなった。力量の拙い筆者にとっては、平常の力以上を出し続けて走行することを強いられた過酷な経験である。転倒することもなく、幸運であった。しかしながら、やはり異様な状況下ではあった。

その時、筆者のチームメイト2名は、わたくしの前後で携帯電話を所持していたけれども、圏外という表示が示された模様で自分たちの現在地を明瞭に確認することができないでいたらしく。とにかく西方向と思しき方角へ走破して、元来のコースである日本海側の幹線ルートまで自力で辿りつくほか、なんら救済方法が見いだせないという事実が判明する。

むやみに移動する徒労を避けて冷静に立ち止まり伴走車が到着するのを待つという判断を一時は下したものの、コースからは外れているし、正確な現在地を認識できていない。そのうえ、当方の所在地を伝える手立てを持たない状態なのであった。実は待ち続けることにも、少なからぬ困難があった。停止しては、身の危険を感じるほどに寒いのである。

やはり元来、計画されていた順路まで自ら行きつく必要がある。意を決して相当な暗がりの中を、身体右側面に強い風を感じながら走り続ける。理由はどうあれチームメイトの2人に置いて行かれるのは、何としても避けなければならぬ。

はるか遠方まで、ほぼ直線道路が延びる。西の方角に向かって走り続けているものの、もはや既に日没時刻は過ぎている。光は全く

ECC 25周年記念 北端をめざす (江別～宗谷岬350km走行企画)

江別サイクリングクラブ設立25周年を記念して、北海道北端の宗谷岬をめざし、リアル方式で350kmを走破する25周年記念走行企画を6月5日(土)から6月8日(日)の4日間で開催します。
皆さんの参加、ようこそお待ちしております。(ECCの強い絆で完成をめざしましょう) 雨天決行

当日持参頂く物 健康保険証 会費(1000円) 補給食ほか ビブス 履(宗谷岬山岳)

1日目	野幌駅23集合	上幌向	旭見沢	美幌駅前	宗谷岬到着	走行者
①	野幌駅 (0812) 8:30スタート 18.2km	(0812) 5.2km	(0812) 17.9km	(0812) 41.3km (2:05:00)	金 田 村 中 水 野	
②	美幌駅前 (0812) 17.8km	砂川 (18:20) 10.9km	新十津川 (0812) 12.8km	南幌道の駅 (0812) 41.3km (2:05:00)	中 西 青 藤 山 崎	
③	南幌道の駅 (0812) 11.7km	釧路 (0812) 10.9km	美幌峠 (0812) 22.7km	釧路立寄 (0812) 44.6km (2:13:00)	松 田 山 田 清水	
④	釧路立寄 (0812) 11.3km	小平 (0812) 28.2km	苫 前 (0812) 5.9km	苫前温泉前 (0812) 44.5km (2:15:00)	工 藤 堀 田 渡 邊	
⑤	苫前温泉前 (0812) 6.5km	網 走 (0812) 18.8km	網走山 (0812) 21.2km	網走道の駅 (0812) 47.5km (2:25:00)	松 田 山 田 清水	
⑥	網走道の駅 (0812) 20.9km	天 塩 (18:20) 24.9km	稚 内 (18:20) 43.0km (2:30:00)	金 田 村 中 水 野 (辻 井)		
⑦	稚 内 (18:20) 27.8km	珠 洲 (18:20) 17.0km	宗谷岬 (18:20) 44.0km (2:15:00)	渡 邊 (川 口)		

宿泊先(宗谷岬)に移動 1日目走行時間 15:40 1日目走行距離 308.0km (15:40:00)

宿泊先 小ホテル 奥田屋 042-22-2118 平097-0005 稚内市大高3-7-17 25:00番手定で連絡入れてます
和室 3部屋 洋室 3部屋 1泊 朝食付き

夕食 居酒屋 いちばにほへと 南稚内店 090-5852-5742 2時間飲み放題付き バイクキング 20:30予約

2日目
全長走行 宗谷岬 (0812) 8:00スタート 8.5km 稚内温泉 (0812) 8.2km 稚内立寄 (0812) 20.6km 宗谷岬 35.5km (2:00:00)
全行程走行時間 17:40 全行程走行距離 343.5km

表-1 25周年記念 北端をめざす 全行程と担当区間



図-1 25周年記念 北端をめざす 全走行コース地図



写真-1 宗谷岬まで走破しての記念撮影(筆者は最後列左)



写真-2 最北端到着証明とチームが撮影した走行中の筆者



写真-3 オホーツクサイクリング7月3日朝・北見市常呂町



写真-4 左から山口豊氏、政野氏、山口勇気氏、田邊氏



写真-5 山田楓斗氏と伴走車の父、道の駅はなやか小清水



写真-6 全国大会開会式・網走市エコセンター2000エコホール



写真-7 大会に参加した大分県と熊本県サイクリング協会の旗



写真-8 あばしりサイクリングフェスタ主催者と主管の両フラッグ

ない。自分たちのライトだけだ。停止した箇所から走って、20分ないし30分ほど経過したろうか、正面に道がない箇所まで出た。つまり日本海に突き当たったT字路である。これが日本海沿いの正規コース。右折して北上する。やがて吹雪時に自動車などが待機するためのトンネル状のシェルターに辿り着く。

わたくしたちは、このシェルター内で後続の伴走車に拾ってもらった。夏至の季節に、真冬の時期こそ有効な退避施設で救われたのである。シェルター内は雨から逃れたものの、風は吹き抜ける。伴走車が到着するまで、激しい寒さによる震えは続いた。

自動車の車内に乗り込んでも、衣服が濡れた状態であるため寒さは治まらない。結局、稚内市街地の宿舎に着いて、入浴するまで我慢を強いられた。真夏の悪寒であった。いずれの日にか人間には間違いなく他界する日が到来するはずであるが、わたくしの死因の何パーセントかは、本年度の稚内走破であると信じている。

翌日の稚内ノシャップ岬から宗谷岬までの走行は、1～2度ぱらぱらと小雨が降ったものの、何秒間も続く降雨ではなかった。だが海岸線の風は、それなりに手を緩めなかった。このため時速17～18kmのスピードで走破することとなった。その2日目のようすを写真の1ならびに2として掲げる。

6. 全国サイクリング大会in網走

本年度はオホーツク海沿岸と網走市に縁があった。まず7月1日（金）、2日（土）、3日（日）の3日間にわたって第35回記念インターナショナルオホーツクサイクリング2016

が開催された。初日の午後、雄武町民センター駐車場に参加者が集合し、夕刻から前夜祭が举行された。参加者名簿には738名の氏名と65名の指導員が明記されている。著者のゼッケンは52番が与えられた。第1梯団、第1グループである。

走行1日目のアップダウンは午前中から激しい。雄武町（おうむちょう）から東隣の興部町（おこっぺちょう）にかけてのエリアである。紋別（もんべつ）市域では、登り坂と下り坂が長く続く。昼食はコムケ湖キャンプ場。水平線が広がる良好な地だ。

午後も明るいうちは好条件に恵まれた。しかし宵闇が迫る夕暮れ時から降り出した雨が本降りとなる。しかもサロマ湖畔を集団で走行していた著者たちであったが、歩哨がわたくしたちよりも先回りして待ち構えることに遅れたため道案内不在となった分かれ道で先頭の走車が間違って左折してしまった。東進すべき地点を、西方向へ戻ってしまったのだ。さすがに数分後には全体が気づくこととなり、雨の中を引き返す。

暗闇の中ではあったが、元来目にするのでできなかった光景に浴する機会を得た。

その2日目のようすを、写真の3～5に掲げる。

10月1日（土）と翌2日（日）はオホーツクブルーライドあばしりサイクリングフェスタ第60回全国サイクリング大会in北海道網走であった。第1日目の午後、網走市エコーセンターに全国から走者が集う。開会式後の交歓会には、4月14日（木）21：26震度7激震の予震と4月16日（土）1：25震度7同じく激震（本震）に見舞われた熊本県からも参加チームがあった。個人的な思いではあるが、

言いようのない感激を覚えた。その会場のようすを写真-7として掲げる。

翌朝、エコーセンターにて8:30出走式。9:00同所を集団ごとに出発。筆者ら札幌サイクリング協会16名は77km第1グループとして最初にスタートした。この日は早朝から好天であった。旧鉄道路線跡を整備したサイクリングロードを爽快に行く。網走の地形はなだらかである。だが折り返し後、筆者は初めての経験に驚くこととなる。走行中に他車と接触して路上で転倒したのである。

登坂コースに入って間もなくのことであった。前後に他車が連なっている。長い車列が形成されていた。登り坂を迎えて前の自転車に遅れないようにと、ペダルを踏み込んだ。その折に視線が一瞬、下を向く。これがいけなかった。道路の中央側へ出ることは危険であると日頃から認識していたため、自車を無意識に道路左側へ寄せていた。

その結果、前を走っていた山口氏の後輪左側に、わたくしの前輪右側が接触。道路の左端路上で、わたくしは自転車の右側を下にして転倒。著者自身は自車の上に倒れることなく、自転車よりも2mくらい遠方で、前転することとなった。けがはなかった。しかし後続車であった札幌サイクリング協会の吉田氏が、わたくしの自転車を避けようとして急停車。このため転倒してしまう。氏も幸い、けがはなかった。ご迷惑をかけた。前方の山口氏は驚かれたものの転倒には至らなかった。深謝である。つぎの給水所で改めて、両氏を探し出してお詫び申し上げた。

本年の網走は、明るい橙黄色が鮮やかなエゾカンゾウが浜辺の広々とした草原に点在して花開いていた。ただ単に自転車で走りすぎ

るのが勿体ない光景であった。一方で、本年度のサイクリングでは初めての経験が重なった。危険と隣り合わせのスポーツであった。

7. むすび

本稿においては江別サイクリングクラブの活動実態の一部を報告した。本年度も例年通り4月中旬（本年度は17日曜日）に集合して「愛車整備研修会」を実施した。そして翌月5月半ば（本年度は15日曜日）に「足ならしサイクリング」へとメンバー揃って出かけるなど恒例の行事は実施した。この日は終日、強風であった。6月5日（日）は道立野幌総合運動公園をスタートならびにゴール地点とする「センチュリーライド」の事務局がたとして、札幌サイクリング協会と江別サイクリングクラブのメンバーが助力にあたる。歩哨としての安全確保が最大の担当業務であった。

7月10日（日）石狩市の浜益でのフルーツ狩りコースにも、多くのメンバーが参加している。9月11日（日）には札幌サイクリング協会の当別スウェーデンヒルズコースも開催された。著者は初めて自車のパンクを経験した。6年間全くパンクをしなかったことが稀であったろう。

会員そろって走行する行事としてはシーズン最後の納会サイクリングは10月10日体育の日であった。なお著者は本務の教授会あるいは保護者懇談会などのため参加することが叶わなかったが、羊蹄山一周（8月2日）、目の不自由な方々のための2人乗りタンデム車走行（8月28日）、洞爺湖一周（9月13日）ほかも実施された。

なお本年度の記念企画であった稚内行きを達成した夜、工藤氏が「これくらい条件が悪くても、みんな走り切ってくれるという事は、次から相当に厳しい計画を立てても大丈夫だという事だな。」という感想を漏らしたのを、筆者はすぐ近くで耳にした。言葉が出なかっただけでなく、苦笑することを禁じえなかった。つくづく雨の1年間であった。

謝辞 本稿をまとめるに際しては実に多くの方々から多大なる指導とお力添えを賜った。札幌サイクリング協会の吉田清司氏、政野順一氏、清川純子氏、江別サイクリングクラブの金田一夫氏、工藤淳二氏、川口一哉氏、齊藤信吾氏、清水敏明氏、杉中剛氏、中西敏雄氏、松田幸良氏、山端正春・名津見氏父子、山口豊・勇気氏父子、山口氏子息の友人田邊雄大氏、山田楓斗氏父子、荒田孝司氏、齊藤慶一事務局長ほか1年間ともに走行した面々、お世話になった方々など、この紙面を借りて心からの謝意を表すものである。上記の皆さんは稚内行き、あるいは網走行きにおいて一緒に走行して下さった。加えて網走市においては、財団法人網走監獄保存財団が運営する博物館網走監獄の今野久代氏、配島淳氏ほか多くの方々のお世話になった。また日頃よりサイクルセンターマツバラの松原光夫氏には、自転車の整備・相談にのって頂いている。くわえて江別サイクリングクラブの石垣秀人氏には、自転車だけでなくまちづくり活動をも通して、公私両面でお世話になっている。深謝申し上げる。

本年度、著者は新制度によるサイクリング・インストラクター（アクティブ）を受験し、合格することができた。同インストラク

ター登録証の有効期限は2019年3月31日までとなった。この受験に際して御指導を賜った札幌サイクリング協会の金田一夫会長に、こちらより謝意を申し上げる次第である。

注

- 1) 「子どもの貧困と学習支援」川口洋誉、『ここまで進んだ！格差と貧困』稲葉剛・青砥恭・唐鎌直義・藤田孝典・松本伊智朗・川口洋誉・杉田真衣・尾藤廣喜・森田基彦・中西新太郎、新日本出版社、2016年4月5日、P-126
- 2) 「待ってました／自転車の季節／久しぶりのサイクリング 整備をおさらい」、『北海道新聞』北海道新聞社編集部編集、同社発行、2012（平成24年）4月2日
- 3) 「Q 自転車に乗る時に気をつけること／点検しっかり ルール守って／空気圧、ブレーキ確かめよう」、前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）5月5日
- 4) 「自転車 正しく乗ろう」、前掲『北海道新聞』2015年（平成27年）5月9日
- 5) 「自転車攻略 こつはバランス／まずペダルはずし地面ける」、前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）4月13日
- 6) 「自転車 手軽に私仕様 サドル、フレーム…色、模様自在」、『讀賣新聞』讀賣新聞社編集部編集、讀賣新聞社発行、2016年（平成28年）1月9日
- 7) 「自転車大型店／参入相次ぐ／ホームマック札幌に1号店」、前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）3月20日
- 8) 「自転車関連1000品目ずらり／イオンバイク 北見に道内1号店」、前掲『北海道新

- 聞』2013年（平成25年）3月16日
- 9)「もう雪解け 自転車商戦 加速中／「3人乗り」「パンクなし」人気」, 前掲『北海道新聞』2015年（平成27年）3月21日
- 10)「普段は見えないヘルメット／首に巻くエアバッグ好評／自転車用, スウェーデン女子学生発明」, 前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）8月13日
- 11)「電動自転車 シニアに照準／ヤマハ, プリジストン サドル低く, 軽く」, 前掲『北海道新聞』2015年（平成27年）3月4日
- 12)「手入れ簡単な電動自転車」, 前掲『北海道新聞』2015年（平成27年）3月4日
- 13)「スパイクタイヤ じわり普及／自転車過信は禁物／雪山で死角, 道幅狭く」, 前掲『讀賣新聞』2016年（平成28年）1月26日
- 14)「中古自転車 快走／消費税増税で注目度アップ／放置車をリサイクル, 新品の半値」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）4月9日
- 15)「とっておきスポット 5／エルフィンロード＝北広島市／走るもよし, 撮るもよし」, 前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）5月1日
- 16)「設立20年目の江別サイクリングクラブ」拙稿, 『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 第3号 2012』北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要編集委員会, 同大学同学部発行, 2012年3月, PP. 99-110
- 17)「にっぽん縦断こころ旅 ～思い出の場所, エピソードを募集」, 『maizuru 広報 まいづる 4月1日号』京都府舞鶴市広報公聴課編集, 同市発行, 2013年4月1日, P-9
- 18)「フェイス／火野正平／手紙が導く初めての場所」, 前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）5月19日
- 19)「BS／CS「弱虫ペダル」BS. スカパー！／オタク少年 自転車競技部に」, 前掲『讀賣新聞』2016年（平成28年）8月20日
- 20)「雨の中, ママチャリ力走／札幌・モエレ沼で3000人耐久レース」, 前掲『北海道新聞』2012年（平成24年）6月18日
- 21)「こいで発電 意識どう変化？／自転車に太陽光パネル, 風車, ダイナモ／北大グループ 耐久レースで実証実験」, 前掲『北海道新聞』2012年（平成24年）7月25日（夕刊）
- 22)「トライアスロン総距離226.2キロ／「アイアンマン」8月道内初開催／洞爺湖, 羊蹄山麓ぐるり」, 前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）2月6日
- 23)「仲間で4時間汗／ママチャリ疾走／札幌で耐久リレー大会」, 前掲『北海道新聞』2013年（平成25年）6月24日
- 24)「十勝岳 自転車で駆け上がろう／上富良野で7月に大会／高低差 道内最大の千メートル」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）1月29日
- 25)「走／ママチャリ 4時間耐久レース 札幌」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）6月23日
- 26)「夏のニセコ 銀輪駆ける／道内初のクラシックレース」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）7月14日
- 27)「オホーツクの風／受けて829人完走／サイクリング閉幕」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）7月14日
- 28)「こいだ先 美味が待つ／自転車で食巡り／空知を駆けた」, 前掲『北海道新聞』2014年（平成26年）8月18日

- 29)「西胆振 自転車で疾走／74人参加 初のロングライド」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)9月8日
- 30)「初秋の十勝快走 全道サイクリング」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)9月8日
- 31)「ツール・ド・北海道 あす開幕／道央・道東 疾走543キロ／見どころ チームワークが勝敗左右」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)9月12日, P-19特集
- 32)「ツール・ド・北海道開幕／銀輪 大地駆ける秋」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)9月13日
- 33)「千歳でツール・ド・北海道開幕／「行けー！」選手に声援」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)9月14日
- 34)「谷垣幹事長は頸髄損傷／自転車事故 復帰めど立たず」, 前掲『北海道新聞』2016年(平成28年)7月26日(夕刊), P-3
- 35)「谷垣幹事長が辞意 首相慰留」, 前掲『北海道新聞』2016年(平成28年)7月30日, P-2総合
- 36)「谷垣氏辞意 首相は続投要請／「細田氏が当面代行」案」, 前掲『北海道新聞』2016年(平成28年)7月31日, P-3総合
- 37)「自民幹事長に二階氏／首相, 谷垣氏の続投断念」, 前掲『北海道新聞』2016年(平成28年)8月1日(夕刊), P-1
- 38)「自転車／疑似運転で事故防止／麻生自動車学校 シミュレーター使う教室好評」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)4月11日(夕刊)
- 39)「自転車 押して歩こう／福岡・天神地区／事故防止へ推進区間」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)4月1日
- 40)「迷惑自転車やめよう／歩道暴走や駐輪…／札幌市など街頭啓発 道警, 取り締まり強化へ」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)4月13日
- 41)「自転車運転 マナー守って／札幌中央署など街頭指導」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)5月11日
- 42)「自転車ルール 動画で紹介／元コンサ曾田さん 学生らと制作」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)5月20日
- 43)「自転車走行 気をつけて／高校生ら 反射材配り街頭啓発」, 前掲『北海道新聞』2014年(平成26年)4月11日
- 44)「自転車マナー守って／江別署と組合が街頭啓発」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)6月22日
- 45)「自転車事故防げ／札幌中央署など指導」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)7月20日
- 46)「神出鬼没の自転車警官／パトロール隊結成 伊達署員」, 前掲『北海道新聞』2015年(平成27年)6月13日
- 47)「現代かわら版 車道の自転車 正しい走り方は?／記者が札幌中心部走行 疑問点を道警に聞く／歩行者妨害2万円以下の罰金」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)5月17日, P-25札幌圏
- 48)「江別署と学生グループ 自転車盗防止へタッグ／鍵配り二重施錠を」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)5月17日, P-26江別
- 49)「危ない自転車 厳罰化／酒酔い容疑道内初逮捕／人身事故増 信号無視も」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)6月23日

- 50)「自転車の講習義務化／対象や罰則なお検討」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)2月14日
- 51)「自転車交通ルール ゲームで学べます／白石署ホームページで公開／専門学校生4人が制作」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)3月22日
- 52)「自転車欠陥で転倒し障害 1億8900万円賠償命令／輸入元に 東京地裁」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)3月26日
- 53)「悪質自転車に安全講習／14行為で義務化 携帯使用も対象」, 前掲『北海道新聞』2015年(平成27年)1月20日
- 54)「自転車危険行為 摘発6521件／法改正後半年で 絶えぬ事故 憤る遺族」, 前掲『讀賣新聞』2016年(平成28年)1月12日
- 55)「ボロクル快走 札幌貸自転車／利用3.6倍 採算性になお課題」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)10月17日
- 56)「札幌の自転車共同利用「ボロクル」5年目／会員登録1万件突破」, 前掲『北海道新聞』2015年(平成24年)7月31日
- 57)「野幌駅, 道情報大拠点に市が50台／通勤, 通学に自転車共用／8月開始, 登録料500円」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)2月16日
- 58)「8月開始の共用自転車／利用会員2日から募集／登録500円で11月まで無料」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)3月28日, P-30江別
- 59)「自転車共同利用 あす開始／愛称は「のっちゃり」／50台80人で利用」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)7月31日
- 60)「名駅前に駐輪の「筒」 大名古屋ビル地下／1000台分 中部初の高速収容」, 『中日新聞』中日新聞編集部編集, 中日新聞社発行, 2016年(平成28年)1月22日, P-1
- 61)「検証さっぽろ圏 第4部・観光 3／中国人を狙え 下 サイクリングツアー／景観生かし基盤づくりを」, 前掲『北海道新聞』2012年(平成24年)8月3日, P-27札幌圏
- 62)「田園地帯 銀輪駆ける／空知巡る旅 観光資源化へ 振興局体験会」, 前掲『北海道新聞』2013年(平成25年)10月28日
- 63)「どうおう見聞録／景観やグルメ 楽しむイベント人気／サイクリング 観光の柱に／自治体など意欲的に企画」, 前掲『北海道新聞』2015年(平成27年)7月31日
- 64)「旅を拓く 5／爽快 道北サイクリング／海外富裕層中心に定着」, 前掲『讀賣新聞』2017年(平成29年)1月6日